

## 鷗外「椋鳥通信」に見るダンヌンツィオ受容

渋江 陽子

### はじめに

ガブリエーレ・ダンヌンツィオ (Gabriele d'Annunzio, 1863-1938) の日本における受容を考えると、鷗外森林太郎 (1862-1922) の果たした役割は非常に大きい<sup>1</sup>。おびただしい分量の海外の文壇情報を日本に伝えた鷗外であるが、この同世代のイタリア王国の作家にも大いに興味を抱いたようで、1900年代初頭から小説や戯曲の紹介文や批評を書き始めている。そして1909年3月、文芸雑誌《スバル》で海外情報欄「椋鳥通信」の連載<sup>2</sup>を開始すると、ダンヌンツィオの情報も頻繁に載せた。

「椋鳥通信」の主たる情報源は、日刊紙《ベルリン日報》(Berliner Tageblatt) であることが明らかにされている<sup>3</sup>。ドイツ帝国の首都で発行された新聞は、シベリア鉄道で鷗外の元へ届いていた。1904年の開通数年後に整備された国際間利用によって、ヨーロッパからの小包郵便物は、航路で要していた時間の約半分、2～3週間ほどで日本に到着するようになっていた<sup>4</sup>。

ドイツの新聞でイタリアの作家のことが報じられているのは、ダンヌンツィオが国際的な名声を得ていたからである。イタリアでは詩人として知られていたが、詩の翻訳は困難であることから、国外では小説家、戯曲家として有名であった。ドイツ語への翻訳は、彼が本国で地歩を固め始めた1880年代末に始まり、特に1890年代後半から1900年代初めにかけては次々と翻訳書が出版された<sup>5</sup>。本人の派手な行状が常に話題を求めるジャーナリズムと相性が良かったのは、この「椋鳥通信」に見る通りである。

雑誌《スバル》は1909年1月に創刊され、1913年12月までの5年間に通巻60冊が

<sup>1</sup> 受容全般については、平山城見『ダンヌンツィオと日本近代文学』（試論社、2011年）に詳しい。

<sup>2</sup> 本稿では、「椋鳥通信」の引用は以下の岩波文庫版に依る。池内紀編註『森鷗外 椋鳥通信（上）（中）（下）』全三冊、岩波書店、2014-2015年。引用のあとに「上」「中」「下」と頁数のみ記す。原綴りへの振り仮名、〔 〕で記された読みと訳は省略した。人物名前後の空白も省き、詰めて表記している。

<sup>3</sup> 金子幸代「森鷗外『椋鳥通信』への視角3——『椋鳥通信』の原典ベルリナーターゲブラットについて——」『富大比較文学』第3集、2010年12月、134-141頁。金子幸代『森鷗外生誕150周年記念——異文化理解の検証と普及——「知の東西融合」シンポジウム報告（2012/10/25）』、富山大学人文学部、2012年10月。

<sup>4</sup> 山口徹「文芸誌『スバル』における「椋鳥通信」——一九〇九年のスピード」『学術研究：国語・国文学編』（早稲田大学教育学部）、第53号、2005年2月、39-49頁。

<sup>5</sup> 拙稿「ダンヌンツィオの初期受容をめぐる——「アルプス越え」から日本へ」『ダンヌンツィオに夢中だった頃 生誕150周年記念展（東京・京都2013-14）と研究の最前線』（イタリア地中海研究叢書1）、2015年、284-298頁。ダンヌンツィオとドイツ、オーストリアとの関わりについては、以下に詳しい。D'Annunzio e la cultura germanica, Atti del VI Convegno internazionale di studi dannunziani, Pescara, 3-5 maggio 1984, Centro Nazionale di Studi Dannunziani; Pietro Gibellini (a cura di), D'Annunzio europeo, Lucarini, Roma, 1991.

刊行された。鷗外は1909年3月号から「椋鳥通信」を開始し、休載は3回のみで、55回にわたって連載を続けた。鷗外の署名はなく、ドイツに住む無名氏による寄稿という体裁をとっているが、書き手が誰かは知られていたようである<sup>6</sup>。《スバル》が休刊になると、1914年1月創刊の《我等》で「水のあなたより」という名の海外情報欄が始まった。形式が少し変わり、今度は完全に無署名になっている。だがこの連載は同年9月に9回目を数えたところで終わってしまう<sup>7</sup>。

「水のあなたより」の最後となった回（1914年7月15日発）で、鷗外は、6月28日に起きた「堯皇太子と妃との横死」、つまりサライエヴォ事件を詳細に伝えている。オーストリア・ハンガリー帝国の皇位継承者フランツ・フェルディナント（1863-1914）が、その妃とともに、軍事演習の視察のため訪れていたボスニアの州都サライエヴォでセルビア人民族主義者に暗殺された。「横死はヨオロッパの大戦の基になるかも知れない」という危惧もここには記されている（下、474頁）。それは現実のものとなった。一ヵ月後の7月28日、オーストリア・ハンガリーは、セルビア王国に宣戦布告をするに至る。セルビアの後ろ盾であったロシア帝国が総動員令を下すと、オーストリアと同盟を結んでいたドイツも総動員令を出しロシアに宣戦布告した。ドイツとロシアは交戦状態に入り、「椋鳥通信」を成立させていたシベリア鉄道は「切斷」された<sup>8</sup>。

「椋鳥通信」および「水のあなたより」は、結果的に、第一次大戦勃発までの西欧の約5年半を凝縮して伝える記録となった。この時期はいわゆるベル・エポックと呼ばれる時代の末期にあたるが、ヨーロッパは戦争と無縁だったわけではなく、イタリアは1911年にオスマン帝国に対してリビア戦争を起こし、これに二度のバルカン戦争が続いた。ダンヌンツィオの名はリビア戦争に関連しても出てくる。本稿では、大戦前の5年半ということ意識しながら、鷗外が伝えたダンヌンツィオの情報を追っていきたい。詩人は当時の日本の文壇において話題性の高い作家であり、「椋鳥通信」と「水のあなたより」を通じて、主役・脇役合わせ、60を超えるトピックで登場している<sup>9</sup>。時系列で並べるだけでは話題が錯綜してわかりにくいいため、いくつかのテーマに分けて見ていくことにする。

<sup>6</sup> 松木博「「椋鳥通信」の表現実践」、鷗外研究会『森鷗外『スバル』の時代』双文社出版、1997年、113-121頁。

<sup>7</sup> 《我等》も1914年内に終刊となる。

<sup>8</sup> 山口徹「鷗外「椋鳥通信」時代の情報圏——一九一四年の切斷——」『鷗外』第91号、2012年、185-198頁。

<sup>9</sup> 山口徹『鷗外『椋鳥通信』全人名索引』翰林書房、2011年。金子幸代「『椋鳥通信』への視角5——椋鳥通信における人名の頻出順位（トップ二十九）——」（『富大比較文学』第5集、2012年12月、63-65頁）によると、「椋鳥通信」では、ダンヌンツィオの登場回数は全体で6番目である。ゲアハルト・ハウプトマン（1862-1946、120回）、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832、109回）、レフ・トルストイ（1828-1910、107回）、ヨハン・アウグスト・ストリンドベリ（1849-1912、77回）、フランク・ヴェデキント（1862-1918、68回）に続いて、リヒャルト・ヴァーグナー（1813-1883）と並ぶ63回。「水のあなたより」には7回登場する。

## 1. 未来派宣言、自動車、飛行機

ダンヌンツィオが「椋鳥通信」に初めて出てくるのは、連載第3回目の1909年3月12日発（《スバル》5月<sup>10</sup>）である<sup>11</sup>。同年2月20日付のフランスの日刊紙《ル・フィガロ》第一面に発表された「未来派宣言」が日本にいち早く伝えられるときであった。「未来派宣言」は過去との決別を訴え、イタリアに溢れる“過去の遺物”の破壊を主張した。宣言によれば、戦争は「唯一の世界の衛生法」である。讃えられるのは「速度の美」で、レーシング・カーは「サモトラケの勝利の女神より美しい」。

宣言の書き手フィリッポ・マリネッティ（1876-1944）はおそらく日本では知られておらず、読者にはすでにおなじみのダンヌンツィオが引き合いに出されたのである。

○伊太利詩人F. T. Marinetti という先生は未来主義（Futurismo）というものを発表した。Cairoに住んでいた伊太利人の子で仏蘭西で育ったのである。仏蘭西語が上手なので、これまでの作は仏蘭西語で書いた。[……] D'Annunzioを攻撃した書にはLes Dieux s'en vont D'Annunzio resteと題してある。（上、27頁）

『神々は去り、ダンヌンツィオは残る』<sup>12</sup>（1908年）は、ダンヌンツィオに賞賛と反発の念を持たざるを得なかった後続世代が提示した批判の書のひとつである。古典主義者ですでに権威となっていた詩人は、マリネッティにとって戦うべき相手であった。だが一方でこの二人には共通点もあった。新しい科学技術、自動車、飛行機などへの強い関心である。飛行機による有人動力飛行は1903年に成功したばかりであった。

二人とも一般にはまだ珍しい自動車を買っている。マリネッティは前年の1908年に新車で事故を起こして運転をやめてしまったが、ダンヌンツィオは舗装されていない道路でもスピードを出して運転していた。

1909年6月24日、詩人はトスカーナ地方シエーナの近くでスピード違反を起こし、11月に法廷に召喚された。このことを伝える1909年12月13日発（《スバル》1910年2月）の「椋鳥通信」の記事は、おかしみ漂うプロフィール紹介となった。

○澳匈国公使伯爵Luetzowと一しょに自動車に乗って、余り速度を出しすぎたので、Gabriele d'AnnunzioはSienaの法廷へ呼び出された。判事はダンヌンチオという男は何ものだか知らないで、Pescaraの本籍へ問合せた。その回答書に云わく。「本人は一八六三年八月三十一日生の男子にしてFrancesco d'Annunzio

<sup>10</sup> 雑誌の発行年は「椋鳥通信」の発信年と同じ場合は省略。「5月1日発行」の5号を「5月」と記す。

<sup>11</sup> 《スバル》には1909年1月の創刊号から登場しており、「雑録」欄において『イオリオの娘』（*La figlia di Jorio*、1904年初演）の紹介とその関連情報が載っている。署名の「栗生」は、栗原元吉（1882-1969）と同定されている。cf. 前掲「鷗外「椋鳥通信」時代の情報圏」196頁。

<sup>12</sup> 引用部分でLes DeuxをLes Dieuxに修正。「神々」とは、作曲家ジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）と詩人ジョズエ・カルドゥッチ（1835-1907）を指す。cf. ハンス・ヨアヒム・クナウプ「未来派とダンヌンツィオ——マリネッティ著『神々の退場、ダンヌンツィオ残る』について——」『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第54号、2017年、1-16頁。

と Beneditti 氏 Luigia とを父母とす。兵役義務は羅馬の騎兵聯隊に於て果したり。Gallese 公爵の女を娶りて、四子を設け、尋いで離別す。虹彩膜青く、頭に髪なし。品行順良にして人と争わず。財産なし。女子と犬と馬を愛す。職業は詩人なり。前科は決闘一回、自動車の速度過大なりしこと二回。」(上、182頁)

同乗していたというハインリッヒ・フォン・リュッツォウ (1852-1935) は、1904年から1910年までオーストリア大使を務めた人物である。情報源の1909年12月1日付《ベルリン日報》の記事に誤りがあり<sup>13</sup>、生年月日は1863年3月12日が正しい。中産階級出身の詩人は反対されながらガッレーゼ公爵の娘マリア・アルドゥアン (1864-1954) と結婚したが、彼女との間に授かった子供は4人ではなく3人である。「離別」について注釈しておく、二人は別居を続けたものの離婚はしていない。

自動車と同様、あるいはそれ以上にダンヌンツィオが情熱を注ぐことになるのが飛行機である。1910年2月刊行の長篇小説『そうでもあり、そうでもなく』(*Forse che si forse che no*) は疾走する車の中で交わされる会話の場面から始まり、ハンドルを握る主人公は飛行士である。この作品でダンヌンツィオはラテン語由来の *velivolo* という語を「飛行機」という意味で使い、その用法は一般に定着する。

1910年1月28日発の「棕鳥通信」(《スバル》4月)はこの「飛行機小説」を取り上げ(上、241-242頁、250-251頁)、1910年3月5日発(《スバル》5月)では、カール・フォルメラ (1878-1948) によるドイツ語版の刊行を伝えた<sup>14</sup>(上、270頁)。

小説の完成に大きく寄与したのは、飛行の実体験であった。1909年9月12日、北イタリアのプレッシャで開催されていたエアレースを観戦したとき、ダンヌンツィオは飛行機に乗せてもらうという貴重な体験をした。同年9月13日付、14日付《ベルリン日報》はこのニュースを報じているが、「棕鳥通信」にはなく、おそらく鷗外はこの記事を読まなかったのだろう。飛行機に関する情報も熱心に追っていた鷗外であるから、目にしていたら取り上げたにちがいない。1909年7月25日のルイ・ブレリオ (1872-1936) によるドーバー海峡横断飛行のことも伝えているが(上、116頁)、プレッシャにはブレリオもいた。

ダンヌンツィオと飛行機の組み合わせが次に出てくるのは、1910年5月7日発(《ス

<sup>13</sup> 秘書であったトム・アントンジーニ (1877-1967) の著書で、同じ報告書の一部が引用されており (Tom Antongini, *Vita segreta di Gabriele D'Annunzio*, Mondadori, Milano, 1938, p. 9.)、これによると8月31日は報告書の日付である。子供の人数の間違ひは同書でも指摘されている。ダンヌンツィオはナポリ貴族の女性マリア・グラヴィーナ (1861-1926) との間にも、認知した娘と認知しなかった息子がいる。母の名はイタリア語表記では Luisa de Benedictis である。

<sup>14</sup> 鷗外所蔵のダンヌンツィオの著作16冊のうち、この時期に刊行されているのは以下の4冊である。ルードルフ・ビンディング (1867-1938) 訳『船』(*Das Schiff*, Insel, Leipzig, 1910)、ビンディング、フォルメラ訳『フェドラ』(*Phädra*, Insel, Leipzig, 1910)、フォルメラ訳『そうでもあり、そうでもなく』(*Vielleicht - vielleicht auch nicht*, Insel, Leipzig, 1910)、グスタフ・シュネーリ (1872-1944) 訳『聖セバスチアンの殉教』(*Das Martyrium des Heiligen Sebastian*, Reiss, Berlin, 1913)。1910年8月6日発の通信には『船』の刊行予告がある(中、56頁)。この通信で消息が伝えられるアルベルト・フォン・ブツカマー (1849-1923) による評伝『ダンヌンツィオ』(*Gabriele D'Annunzio*, Schuster & Loeffler, Berlin, 1904) も蔵書に残っている。

バル》7月)の「○Paulhanが飛行機競争に勝ったに就いて、D'AnnunzioはMatinの記者に頼まれて、讃辞を綴った。」(上、369頁)というニュースである。フランス人パイロット、ルイ・ポーラン(1883-1963)は4月末、ロンドン - マンチェスター間のエアレースで勝利を取めた。これを受けて、1910年3月からフランスにいたダンヌンツィオは、日刊紙《ル・マタン》紙の記者の取材に応じた。ポーランへの讃辞は、4月30日同紙第一面の「飛行とフランスの栄光に捧ぐ」(A la gloire de l'Aviation et de la France)という記事に見ることができる。

## 2. ドイツ、オーストリアとダンヌンツィオ

「椋鳥通信」には出てこないが、1909年6月19日付《ベルリン日報》には、前日夜にローマで行われた同紙通信員によるダンヌンツィオへのインタビュー記事が掲載されている。同日のミラノの日刊紙《コリエーレ・デッラ・セーラ》(Corriere della Sera)のほぼ同様の記事から<sup>15</sup>、インタビュアーはドイツ人ハンス・バルト(1862-1928)であると分かる。彼は《ベルリン日報》の通信員で、1887年からローマに住んでいた。美食家としても知られ、前年の1908年にはイタリア各地の飲食店を紹介したグルメガイド『オステリア』(Osteria)をドイツ語で出版。1909年の後半に刊行されるイタリア語版に序文を寄せるのがダンヌンツィオである。

インタビューのメイン・テーマは、北イタリアにあるガルダ湖畔の建築物がドイツ風になっている現状に対しイタリアらしさをどう守っていくか、というものである。気候が温暖で風光明媚なガルドネ・リヴィエラは、1880年代にドイツ、オーストリア人向けの保養地・観光地として開発が始まった。オーストリア人ルートヴィヒ・ヴィマー(1842-1883)は自身の病気の療養のために訪れたこの地に惚れ込み、「カルニャッコ荘」という自分が過ごすための屋敷を手に入れただけでなく、小さなホテルまで建てた。それが湖を臨む最初の宿泊施設であった。彼が志半ばで死去したのちも観光地として発展が続き、ドイツ語圏からの訪問者数は増えていった。1900年にはドイツ語の新聞が創刊されている。こういった“ドイツ化”への批判が起り始め、ダンヌンツィオに意見が求められたのである。

詩人は、「ドイツ人は、ニーチェのように、太陽とイタリアの美に浸るためにイタリアにやってくるはずなのに、なぜ建築を持ち込むのか」と言い、美の感覚を持っているドイツ人であれば反対すべきであり、「ゲーテなら痛烈な風刺詩を書いたことだろう」とかなり批判的である。解決策を問われると、外国人を湖に沈めてしまえばよいと不穏な冗談を飛ばす。

続く話題は、イタリアとオーストリアとの外交問題である。イタリアは、1861年の統一以降、オーストリアとの間に領土問題を抱えていたが、1882年からはドイツ、オーストリアと三国同盟を結んでおり、オーストリアとは複雑な関係にあった。ダン

---

<sup>15</sup> Gianni Oliva (a cura di), *Interviste a D'Annunzio (1895-1938)*, Rocco Carabba, Lanciano, 2002, pp. 160-161. 翻訳はイタリア語の記事から行った。

ヌンツィオは、トレンティーノ地方やアドリア海沿岸地域などのイタリアに帰属すべき領土がオーストリアの支配下にあることに異議を唱える急先鋒の一人であった。

だが、国家間の問題と個人の付き合いは別であることも述べられる。ダンヌンツィオは昨晚オーストリア大使とグランド・ホテルで食事をしたばかりで、大使のことを知性あふれる人物であると語る。近いうちにパリオ祭を見にシエーナまで一緒にドライブする予定である、と。

先述したスピード違反は、どうやらこの時に起こったものと推察される。しかし、ダンヌンツィオが法廷への呼び出しを受けた11月23日の前日、22日付《官報》(Gazzetta Ufficiale、273号)は、オーストリア大使がダンヌンツィオの運転する車に同乗していたと書いた新聞報道に対して、そのような事実はないと否定している。本当に大使は乗っていなかったのだろうか、それとも外交上乘っていなかったことにしておく必要があったのだろうか。

### 3. ヴァーグナー

1910年4月13日発「椋鳥通信」(《スバル》6月)には、「○ハイデルベルヒの美術史教授 Henry Thode が退隠する。Cosima Wagner の娘 Daniela von Buelow の婿で、宗教と芸術とは同一だという論に深入をして、現在の芸術界と懸隔して、立場を失った形になっている人である。」(上、309頁)とある。ヘンリー・トーデ(1857-1920)<sup>16</sup>は、ダニエラ・フォン・ビューロー(1860-1940)と1886年に結婚した。彼女は、指揮者ハンス・フォン・ビューロー(1830-1894)とコジマ・リスト(1837-1930)の長女であった。二人が離婚してコジマがリヒャルト・ヴァーグナーと再婚すると、ダニエラはヴァーグナーの娘となった。

次にトーデが出てくるのは1910年6月10日発(《スバル》8月)で、「○ハイデルベルヒの教授芸術史家 Henry Thode は今年冬季の講義を終ると退隠する。Gardasee の別荘へはいるのである。」(上、420頁)という近況である<sup>17</sup>。別荘とは、ガルダ湖を見下ろす丘に建つ「カルニャッコ荘」であった。イタリア美術史を研究していたトーデは以前よりガルドーネ・リヴィエラを気に入っており、一時期はヴィマー家より借り受けていたカルニャッコ荘をこの年3月に購入したのである。11年後、ダンヌンツィオがこの館の主になるとは誰が予想しただろうか。

トーデとダニエラは1914年6月に離婚し、翌月大戦が始まった。イタリアは当初

<sup>16</sup> トーデとダンヌンツィオは、おそらく面識はなかったと思われるが、アメリカ人ダンサーのイサドラ・ダンカン(1877-1927)はヴァーグナー家とも、後述する女優エレオノーラ・ドゥーゼ(1858-1924)とも交流があった。ダンヌンツィオとは1912年にパリで知り合っている。ダンカンの半生記(1927年刊)には、トーデの姿にダンヌンツィオを連想する箇所がある。「私に芸術について講義していたときの彼 [= トーデ] を、私はもう一人の人物と比べずにはいられない。ガブリエル・ダヌンチオである。トーデはある点で、ダヌンチオに似ていた。彼は小柄で大きな口と、不思議な緑色の目を持っていた。」(『魂の燃ゆるままに——イサドラ・ダンカン自伝』山川亜希子、山川紘矢訳、富山房インターナショナル、2004年、189-190頁。)

<sup>17</sup> 《スバル》1911年2月にも退隠の情報がある(中、187頁)。

中立の立場を保ったが、翌1915年5月、オーストリアに宣戦布告して参戦した。ドイツに宣戦布告をするのは1916年8月のことであるが、ドイツとオーストリアは同盟国であり、イタリアが参戦するとトーデはガルドーネを去り帰国した（先述したハンス・バルトもスイスへと逃げた）。さらに1918年7月、カルニャッコ荘は家具や蔵書ごとイタリア政府に没収された。大戦後の1921年、ダンヌンツィオはこの屋敷を手に入れることになる。「ヴィットリアーレ」と命名して、ここを終の棲家とした。

鷗外は、トーデがヴァーグナーの縁者であったから「椋鳥通信」に記したのであろう。鷗外がドイツへ留学する前年の1883年に作曲家は世を去っていたが、記念行事や妻コジマの動向などが通信には書きとめられている。《スバル》1911年2月の「○Palazzo VendraminにあるRichard Wagnerの死んだ家に浮彫の記念碑が掛かる<sup>18</sup>。」（中、151頁）というニュースもそのひとつである。ヴァーグナーは、1883年2月13日、ヴェネツィアのヴェンドラミン・カレルジ宮殿の書斎で心筋梗塞を起こして亡くなった。

「浮彫の記念碑」とは、彫刻家エットレ・カドリン（1876-1952）によるヴァーグナーの肖像のレリーフのほずである。その下方にはダンヌンツィオの言葉が刻まれている<sup>19</sup>。

碑文の文言が1910年、すでにフランスにいたダンヌンツィオに依頼されたのは、ヴェネツィアとヴァーグナーにゆかりのある長篇小説『火』（*Il fuoco*）を書いていたためである。1900年に刊行されたこの小説の主人公、詩人ステーリオはダンヌンツィオの分身である。ヴァーグナーに心酔するステーリオは、イタリアという“ラテンの地”で、“ラテン民族の総合芸術”を作り上げることを自らに課す。舞台はヴェネツィアで、ヴァーグナーが死去し、ステーリオが仲間とともに作曲家の眠る棺を担ぐ場面で終わる。当時19歳のダンヌンツィオはヴェネツィアに来たことはなかったが、このフィクションを挿入するために時代設定を練り上げた。

ステーリオの恋人である女優フォスカリーナは、「椋鳥通信」でも消息が報じられる女優エレオノーラ・ドゥーゼの分身である。『火』は、ダンヌンツィオが公私にわたる彼女との親密な関係を、フィクションをまじえながらも実録的に描いた作品として話題となった。二人の関係が続いたのは1895年から1904年頃までのことであるが、その後も何かにつけて取り沙汰されていたのは通信からもうかがえる。たとえば、1910年3月5日発（《スバル》5月）には「○Secoloに出したEleonora Duseの弁解書によれば、D'Annunzioが再びこの女優に関係を附けようとしているというのは虚聞である。[……]」（上、264頁）とある。

1910年8月6日発（《スバル》10月）では「○Corriere della SeraにD'Annunzioが外光劇場を立てるといふ記事があった。それをパリイでの事として諸新聞が伝えたが、イタリアでの事らしい。」（中、52頁）と書かれている。ダンヌンツィオは、ヴァー

<sup>18</sup> このニュースの情報源は未詳である。引用文中 Vendramin の綴りを修正している。

<sup>19</sup> “In questo palagio / l'ultimo spiro di Riccardo Wagner / odono le anime / perpetuarsi come la marea / che lambe i marmi.”（この館で人々は、リヒャルト・ヴァーグナーの最後の息が、大理石に打ち寄せる波のように、永遠に続くのを聞く。） 碑版とダンヌンツィオをめぐる経緯については、Gino Damerini, *D'Annunzio e Venezia*, Albrizzi Editore, Venezia, 1992 [1943], pp. 84-85 を参照。

グナーがパイロイトに祝祭劇場を建設したように、1890年代後半、ローマ南に位置するアルバーノ湖畔に野外劇場を建設する構想を持っていた。ドゥーゼもそれに賛同した。『火』では、ローマのジャンニコロの丘でのアポロ劇場の建設が語られている。

1910年夏には、スペイン人のデザイナー、マリアーノ・フォルトゥーニ（1871-1949）らとともに、パリのアンヴァリッド前の広場に「祝祭劇場」（Théâtre de Fêtes）という劇場を建てる企画が持ち上がった。報道はこれに関連するものと思われるが、劇場建設はフランスでもイタリアでも実現しなかった。ヴィットリアーレの敷地で1934年に建設が始まった野外劇場は、ダンヌンツィオの死後に完成した。

#### 4. フランス滞在とカッポンチーナ荘の家財の競売

ダンヌンツィオは、1910年3月パリへ行く。当初は短期間の旅行であったはずのフランス滞在は5年に及び、帰国するのは1915年5月初めとなる。この背景には借金問題があった。フィレンツェ近郊セッティニャーノで1898年から借りていた「カッポンチーナ荘」（Villa Capponcina）で、多数の犬や馬を飼って贅沢な暮らしをしていた詩人はとうとう首が回らなくなってしまった。そのため家財は競売にかけられることになったのである。《ベルリン日報》では Villa Cappucina などの表記になっているが、カッポンチーナ荘のことを指す。）

パリに来たダンヌンツィオの近況とカッポンチーナ荘の問題はどちらも、「椋鳥通信」では1910年5月7日発（《スバル》7月）で初めて報じられる。この回は全体として長く、情報が更新されてゆく様子がよくわかる（第1章の最後に扱った飛行士ポーランのニュースは除く）。

○巴里の Hôtel Meurice に泊っている D'Annunzio は新聞記者に逢わないようにしている。Paris-Journal はどうして聞き出したか、こんなことを書いた。本年二月に Vaudeville 座で興行する筈の脚本を今書いている。その女主人公を Simonne がすることになっている。また Amaranda という仏文小説を書いている。巴里を舞台としたものである。伊太利の青年が巴里に来て種々の閱歴をするという筋である。写実を stiliser する試みだそう。それから Louvre で Pisanello の線画や水彩画を見出して、それを出版させると云っている。（上、350-351頁）

借金問題で窮地に追い込まれたにもかかわらず、詩人は一流のホテル・ムーリスに宿泊していた。『アマランタ』（*Amaranta*）というタイトルの小説は、パリに来る以前から何度も予告されており、この後、1910年6月10日発（《スバル》8月）でも「○巴里で D'Annunzio の書いている小説 *Amarantha* はイタリア生れの曲馬の少女が巴里へ来ての生活を書くのだそう。[……]」（上、413頁）と紹介されているが、結局完成することはなかった<sup>20</sup>。

<sup>20</sup> 「アマランタ」の名は、詩人の友人であったフランチェスコ・パオロ・トステイ（1846-1916）が

○ Fiesole 附近の D'Annunzio が住宅 Villa Cappucina の諸道具を、四月二十六日競売に附するという宣告があった。ダヌンチオは巴里から故障の申立をした。借財は Banco di Roma に一〇〇〇〇〇リイル、Desilo 氏に一七〇〇〇リイルである。(上、353頁)

Desilo は《ベルリン日報》による誤記で、靴職人リヴィオ・デジイ (Livio Desii) という債権者のことであろう。ちなみに、比較的賃金の高かったフィアットの労働者が日給4リラ台の時代である<sup>21</sup>。(あとの引用で総売り上げが4万円と換算されているが、鷗外が1881年に陸軍軍医副に任ぜられたときの月給は32円である。「椋鳥通信」連載時は、軍医としては最高位の軍医総監で、月給は300円であった。)

○前にD'Annunzioの借財の事を書いたが、米人が金を出して競売を止めさせて、その上に当分詩人が困らないように処置をした。(上、357頁)

「米人」と言われているのは、ジョヴァンニ・デル・グッツォ (1867-1944) のことである。詩人と同じアブルッツォ地方の出身の彼は、移民として渡った南米で一財産を成した興行師で、1910年3月に詩人の前に突然現れ、アルゼンチンで講演会を開くことを条件に借金の肩代わりを申し出てくれたのであった。デル・グッツォと契約を交わしてアルゼンチンに行く約束をしたあと、ダヌンツィオはパリに向かったのである。

○ Notre-Dame で日の入るときに orgue を聞せてもらいたいという注文をして、とうとう聴いてもらって、Vierne が弾く accord の声の中に D'Annunzio は黙然として柱廊を散歩していた。借金は人が返してくれるし、気楽な次第である。(上、382頁)

ルイ・ヴィエルヌ (1870-1937) はノートルダム寺院のオルガニストである。二文目は鷗外がたまたま書き加えたひと言であろうか。

この後新聞ではダヌンツィオの北南米への講演ツアーが話題となる。しかし驚くべきことに、詩人はフランスから出ようとしなかった。デル・グッツォは講演会に関する契約不履行を理由に南米の演劇協会から賠償を求められたため、1911年4月、ダヌンツィオに対して裁判を起し、カッポンチーナ荘は差し押さえを受けた。それでもデル・グッツォは家財の売却には反対していたのだが、結局、カッポンチーナ荘の家財は、同年5月終わりから6月に競売にかけられることになる。その同じ5月の

---

曲をつけた『アマランタの4つの歌』(Quattro canzoni di Amaranta, 1907年)に残っている。1907年から1908年まで関係のあったジュゼッピーナ・マンチーニ (1871-1965) に詩人がつけた愛称である。

<sup>21</sup> Sergio Zanichelli, Mario Taccolini, *Il lavoro come fattore produttivo e come risorsa nella storia economica*, Vita e Pensiero, Milano, 2002, p. 305.

22日からは、パリでダンヌンツィオの書いた劇の上演が予定されていた。クロード・ドビュッシー（1862-1918）が音楽をつける『聖セバスチアンの殉教』（*Le Martyre de Saint Sébastien*）である。このため、3月から5月にかけてのダンヌンツィオに関する新聞報道は、カッポンチーナ荘と『聖セバスチアンの殉教』の両方でかまびすしい。遠い日本の「椋鳥通信」にもその騒々しさが反映されているのだが、ここではカッポンチーナ荘の競売のニュースだけを眺めてみよう。友人らの尽力で守られた蔵書以外のものが売りに出された。

○Settignano（Firenze 近在）にある Gabriele D'Annunzio の別荘へ執達吏が踏み込んで、詩人の愛玩している美術品を差し押えた。債権者の主なるものは南米人 Guzzo で、債額十万フランである。その外フィレンチェの裁縫屋には女服の借りがある。詩人はまだ巴里にいる。（四月三日ロオマ）（1911年5月1日発、《スバル》7月／中、308頁）

○債権者 Guzzo 等のために封印を付けられた D'Annunzio の財産は、詩人が五万フランの支払をしたので、封印を剥がれた。残金は跡から払う筈である。詩人は同時に Guzzo に対する訴を起す。（同上／中、313頁）

○Settignano にある Gabriele D'Annunzio の別荘の家財一切は五月十九日に競売になった。白馬 Malatesta はフィレンチェの馭者が八百リラで買った。（1911年6月2日発、《スバル》8月／中、372頁）

○Villa Capucina でとうとう Gabriele d'Annunzio の家財競売があった。可笑しい事には買手は過半女子であった。あのおお勢の貴婦人の集まったところをダヌンチオに見せたかったと云うものがある。食器は大抵ドイツとイギリスの貴婦人が買った。売上約四万円。（1911年7月1日発、《スバル》9月／中、403-404頁）

○Villa Capucina の D'Annunzio の家財競売が全部終わった。総売上高一三〇〇〇〇リラである。（同上／中、409頁）

1912年8月17日発（《スバル》10月）の「椋鳥通信」は、「○二年間外国にいた Gabriele d'Annunzio は借財のかたが付いたので帰国する。丁度二年留守をしたのである。」（下、205頁）と伝えているが、これは虚報に終わる。ダンヌンツィオの借金問題はまだ片付いていなかった。

これより少し前、同年5月2日発（《スバル》7月）には「○Carducci の後に Bologna 大学の文学教授の椅子を占めていた Giovanni Pascoli が死んだので D'Annunzio が候補に推されたがすぐに辞した。」（下、159-160頁）というニュースがあった。4月にポーロニャ大学教授で詩人のジョヴァンニ・パスコリ（1855-1912）が亡くなり（下、155-156頁）、その後任をダンヌンツィオは打診されたのである。

だが述べられているように、引き受ければ少しは経済的な安定をもたらすであろうオファーを詩人は断り、アカデミズムの窮屈さよりも在野の自由を選んだ。

1913年3月30日発（《スバル》6月）で報じられた一件も同じ結末となった。「○Pescara市はPinetaの瀬海地一一〇〇〇平方米突をGabriele d'Annunzioに贈与した。同時に友人が醸金して彼がために別荘を建てる。Fiesoleの別荘は債主に取られて、目下パリイに滞在している詩人は、これで再び家持になるのである。」（下、282頁）という内容である。Pinetaは固有名詞ではなく「松林」の意味で、詩人の故郷のペスカラ市が3月12日の詩人の誕生日祝いに故郷に家を建てることを申し出たのである。この時も詩人は辞退した。

1910年3月にパリに着いて、その夏にアキテーヌ地方ジロンド県アルカシオンを訪れたダンヌンツィオは、海と松林の広がる風景に魅せられ、この地で家を借りた。1913年秋からはパリでの暮らしが主となるが、『聖セバスチアンの殉教』をはじめとするフランス時代の主な作品はアルカシオンの地で書かれた。

## 5. フランスでの活動予告

ダンヌンツィオの作品は、ジョルジュ・エレル（1848-1935）という得がたい翻訳者のおかげで1890年代半ばからフランスでも出版されており、その名はすでに広く知られていた。フランス・アカデミー会員ウージェーヌ・メルシオール・ド・ヴォギユエ（1848-1910）の訃報が「椋鳥通信」で報じられているが（上、319頁）、ロシア文学の紹介者として知られる作家も、1890年代、仏訳されたばかりのダンヌンツィオ作品を高く評価してくれた一人であった。

「椋鳥通信」では、ダンヌンツィオが語った構想中の作品予告も見られる。前章で触れた『アマランタ』のように、結果として実現せずに終わったものを中心にみてみよう。

○Théâtre Françaisで興行させるD'Annunzioの脚本は「Antigoneの影」という題である。Vaudevilleの分は題号未定で、巴里の生活を書いたものである。（1910年8月6日発、《スバル》10月／中、51-52頁）

○Théâtre des Artsの為にD'AnnunzioがBalletを書く。（1911年1月9日発、《スバル》3月／中、215頁）

○仏文の五幕物をD'Annunzioが書いた。題はLa Hache（斧。）（1911年2月5日発、《スバル》4月／中、236-237頁）

○パリイにいる Gabriele d'Annunzio は脚本を二つ書き掛けている。一つは「Viviane と Merlin」で、昔話劇である。今一つは婦人問題を取り扱ったものである。小説は「鶴なき Leda」と「Gioconda の掠奪」との二つである。(1913年7月28日発、《スバル》10月／下、321頁)

○パリイにいる Gabriele d'Annunzio は人形芝居の脚本を四、五種作り掛けている。(同上／下、328頁)

D'Annunzio. 名犬伝を書く。題は La vita dei Cani Illustri である。(《我等》1914年5月／下、433頁)

このうち、予告通り実現したのは、「鶴なきレダ」、現代風には『白鳥なきレダ』(La Leda senza cigno) という小説のみである。1913年7月から8月に《コリエーレ・デッラ・セーラ》で連載された後、1916年に本として刊行された。「Gioconda の掠奪」のジョコンダとは、レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519)の描いた「モナ・リザ」のことである。当初は『モナ・リザの盗奪』(Il ratto della Gioconda) という小説の予定で、1911年9月頃から構想されていたが、『モナ・リザを盗んだ男』(L'uomo che rubò la Gioconda, 1920年) という映画シナリオとして残っている。

1911年8月22日、ルーヴル美術館でモナ・リザが盗まれた事件は世界を驚かせた。「掠鳥通信」は同年9月1日発(《スバル》11月／中、466頁)で第一報を伝え、その後も情報を追っている。事件の解決は1913年12月のことで、こちらは1914年1月10日発「水のあなたより」(《我等》3月／下、403-404頁)で書かれた。犯人は名画を祖国に返そうとしたというイタリア人ヴィンチェンツォ・ベルッジャ(1881-1925)であった。

ダンヌンツィオは、1911年8月27日に《コリエーレ・デッラ・セーラ》の編集長宛ての手紙のなかで「今晚はモナ・リザを盗んだ男の訪問を待っている」<sup>22</sup>などと書き、その後も事件への関与をほのめかしているのだが、真偽のほどは定かではない。映画化されなかったシナリオの登場人物の一人は、アルカシオンに住むダンヌンツィオである。

1911年5月には『聖セバスチアンの殉教』が上演されているが、同じ時期、ダンヌンツィオとリヒャルト・シュトラウス(1864-1949)が共同してオペラを制作しているという噂が流れた。1911年6月2日発(《スバル》8月)には、「○Richard Strauss は目下シムフォニイを書いている。ダヌンチオと共にオペラを作っているという風説は誤である。」(中、367頁)とある<sup>23</sup>。

<sup>22</sup> Franco Di Tizio, *D'Annunzio e Albertini. Vent'anni di sodalizio*, Ianieri, Chieti, 2003, p. 73. cf. 種村季弘『詐欺師の楽園』(白水社、1980年)にも関与への言及に関する記述がある。

<sup>23</sup> 1911年7月30日発(《スバル》10月／中、427頁)にも類似のニュースがある。同1911年5月15日付フーゴ・フォン・ホーフマンスタール(1874-1929)宛ての手紙でも、シュトラウスは、ダンヌンツィオと共同制作中という噂を否定している。(ヴィリー・シュー『リヒャルト・シュトラ

オペラとしては、ピエトロ・マスカーニ（1863-1945）との共作が実現している。だが、1913年に上演される『パリジーナ』（*Parisina*）が二人の唯一の作品である。

○ Mascagni がオペラ *Parisina* を完成して *Rosa di Cypro* の作曲に掛かった。二つ共 Gabriele d'Annunzio がリブレットオを書いている。」（1913年3月3日発、《スバル》5月／下、273頁）

D'Annunzio. Mascagni がためにオペラのリブレットオを書いた。題は「少年十字軍」。《我等》1914年5月／下、430頁）

『パリジーナ』はかつてジャコモ・プッチーニ（1858-1924）へ提供する台本として構想されたが、作曲家に断られた経緯があった。『キプロス島の薔薇』（*La Rosa di Cipro*）も、ここで「少年十字軍」と呼ばれている『罪なき者たちの十字軍』（*La Crociata degli Innocenti*）も、プッチーニに提案したが、うまく事が運ばなかった台本のタイトルである。『キプロス島の薔薇』は、『ピサネル、あるいは香り高き死』（*La Pisanella, ou la mort parfumée*）へと発展し、1913年6月にイルデブランド・ピッツェッティ（1880-1968）が曲をつけて上演される。『罪なき者たちの十字軍』は映画の台本となり、1916年、実際に映画化された。

## 6. フランスでの活動——『聖セバスチアンの殉教』など

パリでは、セルゲイ・ディアギレフ（1872-1929）率いる「バレエ・リュス」が、1909年5月のシャトレ劇場での旗揚げ公演以来、一大センセーションを巻き起こしていた。ロシア人バレリーナのイダ・ルビンシュタイン（1885-1960）のエキゾチックな美しさに魅了されたダンヌンツィオは、彼女のために五幕の聖史劇『聖セバスチアンの殉教』を書く<sup>24</sup>。作曲ドビュッシー、振り付けミハイル・フォーキン（1880-1942）、美術はレオン・バクスト（1866-1924）という豪華な布陣であった。バレエ・リュスからは独立した形で、1911年5月22日から6月1日まで10回の公演がシャトレ劇場で行われた。

「椋鳥通信」はこの作品に注目している。最初の言及は1911年4月4日発（《スバル》6月）の「○仏文のドラマ『聖Sebastianの献身』をD'Annunzioが完成して朗読した。」（中、290頁）であり、同年6月2日発（《スバル》8月）では、新しいニュースが次々

---

ウス ホーフマンスタール、往復書簡全集』中島悠爾訳、音楽之友社、2000年、102-103頁。）

<sup>24</sup> 『聖セバスチアンの殉教』、三島由紀夫、池田弘太郎訳、国書刊行会、1988年。作品については邦訳の解説の他、以下に詳しい。鈴木国男「ガブリエーレ・ダンヌンツィオ「聖セバスチアンの殉教」をめぐって」『グラムシの思想空間』、文流、1992年、325-344頁。村松真理子「ガブリエーレ・ダンヌンツィオの『聖セバスチアン』をめぐって」『文芸研究』（明治大学）、第114号、2011年、203-217頁。前掲『ダンヌンツィオに夢中だった頃』収録、久保昭博「ベル・エポックのラテン人——ダンヌンツィオとフランス」(181-191頁)、内田健一「ダンヌンツィオのカリカチュア」(206-219頁)、笠羽映子「『聖セバスチアンの殉教』とドビュッシー」(260-268頁)。

と書き加えられている。

ダンヌンツィオは、このフランス語の劇を1910年終わりから1911年3月の初めにかけてアルカシオンで執筆しており、以下の第一番目の情報は少し間違っている。だが、ヴェルサイユのトリアノン・パレスにはルビンスシュタインが部屋を借りていたため、春にここにいたのは本当である。1910年にオープンしたばかりであった同ホテルは、この数年後、大戦が始まると病院となった。1917年末からは連合国の最高戦争会議が開かれ、大戦後にはヴェルサイユ条約の準備がここでなされる。

○Hôtel Trianon-Palace (Versailles) で Gabriele D'Annunzio は「聖 Sebastiano の献身」を書いている。子供の時からこの聖者を愛していたのだそうだ。文章は一切の現代掛かった詞を避ける。擬古体 (Archaisme) である。脱稿の上は Chatelet 座で初興行をする。フィレンチェの別荘は債権者の手に渡さなくてはなるまい。代りには Archachon 附近で海に近い、側柏の蔭の白壁の家を手に入れた。初興行が済めば、そこへ行く。(Temps)

○法皇は D'Annunzio の一切の著述を禁書の目録 (Index) に載せさせた。(中、362-363頁)

○パリの旧教僧は D'Annunzio の聖セバスチアンを見に Chatelet 座へ行つてはならぬと予告した。(中、373頁)

5月16日、パリの大司教は信徒へ向けて観劇禁止令を出した。キリスト教の殉教者を扱いながらも異教的な要素が強く、また主役を演じるのがユダヤ系の女性であることもあって、教会側はこの劇の上演を警戒していた。5月8日には教皇庁がダンヌンツィオの著作(詩を除く)を禁書目録に登録する決定を下している。1914年5月の《我等》「水のあなたより」には、「Maeterlink. 全部法皇の禁書 (Index) に入れられた。D'Annunzio はイタリア文の大家だと云うので免れている。」(下、424頁)と書かれているが、すでにこの時に禁書になっている。

○パリイで飛行機が墜落して陸相 Berteaux は即死、首相 Monis は負傷した。(五月二十一日午前八時五十五分パリイ)

○前記 Issy に於ける飛行機墜落事件の為に D'Annunzio の聖セバスチアンの総演は取止になってシャトレ座で内演があった。(五月二十一日パリイ)

○聖セバスチアンの内演に行ったものの報告に、音楽は Debussy, 背景は Bakst (ロシア人) であったが、背景の出来が非常に立派であったそうだ。Ida Rubinstein が聖セバスチアンをした。演は午後九時から夜三時まで掛かった。(中、374頁)

○パリイの新聞批評は一般に D'Annunzio の聖セバスチアンを悪く言っている。そして音楽を作った Debussy と背景をかいた Léon Bakst とを褒めている。(中、374-375頁)

初演前日の5月21日の朝、パリ郊外のイシー・レ・ムリノーで開催されたパリ・マドリード間のエアレースで、飛行機一機が離陸直後に事故を起こした。これに巻き込まれた陸軍大臣モリス・ベルトー（1852-1911）が亡くなり、首相のエルネスト・モニ（1846-1929）は息子とともに負傷した。そのため、この日に予定されていた招待客を迎えてのゲネプロは中止となり、非公開のリハーサルが報道関係者に対して行われた。

評価については、通信に報告されている通り、ダンヌンツィオにとっては成功とは言い難かった。上演時間は通常、約5時間と言われている。

この後も舞台の仕事が続いた。ピッツェッティが音楽を書いた『ピサネル、あるいは香り高き死』は、1913年6月12日、シャトレ劇場で初演された<sup>25</sup>。主演はルビンシュタイン、振り付けはフォーキン、美術はバクストで、演出はフセヴォロド・メイエルホリド（1874-1940）が担当した。ピサ生まれの娼婦ピサネルはキプロスの王に見初められて王と結婚するが、王の母に命じられた女たちによって薔薇で圧迫され殺されるという筋である。

この劇について「椋鳥通信」が報じているのは、1913年4月21日発（《スバル》7月）「○La mort parfumée (La Pisanella) は Gabriele d'Annunzio の新作滑稽戯曲（三幕）である。」（下、289-290頁）、同年6月22日発（《スバル》9月）「○六月十二日にパリイで Gabriele d'Annunzio 作 Pisanella が上場せられる。Kypros 島の王子に思われた娼婦の名である。」（下、311-312頁）、「○Pisanella(d'Annunzio) は Ida Rubinstein が勤めた。」（下、313頁）というものである。

1913年8月31日発（《スバル》11月）には、「○八月中旬に Gabriele d'Annunzio が新脚本を完成したが、題号を発表しない。」（下、341頁）とあり、同年10月5日発（《スバル》12月）にはタイトル不明のまま粗筋が紹介されているが（下、347頁）、どうやら噂レベルのものだったようである。同じ通信内には、「○「鉄」は D'Annunzio の今一つの近作脚本である。」（下、348頁）と「○新作滑稽脚本 Il Caprifoglio(Das Gaisblatt) を Gabriele d'Annunzio が朗読した。」（下、361頁）という情報もあり、この二つは同じものを指している。新作とは、1913年12月14日、パリのポルト・サン・マルタン劇場で初演される三幕の悲劇『スイカズラ』(Le chèvrefeuille) であった。イタリア語タイトルは『鉄』(Il ferro) で、「スイカズラ」を直訳すると caprifoglio となる。この作品は1914年1月10日発「水のあなたより」(《我等》3月) で詳しく紹介された。

Gabriele d'Annunzio. Porte St. Martin で上場した新脚本は Le Chèvre-feuille と題

<sup>25</sup> 島崎藤村（1872-1943）は、1913年5月末から1916年4月末までパリに滞在している。来て間もなくの1913年6月、小山内薫（1881-1928）とともにシャトレ劇場で『ピサネル』を観劇した。同年9月7日から10日の《東京朝日新聞》に掲載された「露西亞の舞踏劇とダヌンチオの『ピサネル』」の最終回でそのときのことが語られている（『藤村全集 第6巻』筑摩書房、1967年、231-238頁）。小山内薫は1912年12月から翌年8月まで、演劇研究のためにロシア、ヨーロッパを回っており、一週間あまりのパリ滞在であった。cf. 河盛好蔵『藤村のパリ』（新潮社、1997年）、曾田秀彦『小山内薫と二十世紀演劇』（勉誠出版、1999年）、山田登世子『「フランスかぶれ」の誕生——「明星」の時代1900-1927』（藤原書店、2015年）。

したものである。Aude と云う娘が父を殺された。さて父の敵を知って見ると、それが母と結婚している。即ち Hamlet に似た関係になっている。然るに父の死んだのは、父が不治の病に罹ったので、親友に頼んで殺して貰ったのであった。それでも母は娘の情愛を失わぬために、後の夫を殺す。これが粗筋である。(下、404-405頁)

パリで『スイカズラ』が初日を迎えた翌日、1913年12月15日にはミラノのスカラ座でオペラ『パリジーナ』が初演された。1912年5月2日発(《スバル》7月)で、「○Pietro Mascagni と D'Annunzio とで La Parisina と云うオペラを作る。主人公は Rimini 公爵の女 Parisina Malatesta である。」(下、167頁)と予告されていた作品である。ジョージ・ゴードン・バイロン(1788-1824)の叙事詩『パリジーナ』(1816年)と同じ題材である。

パリジーナ・マラテスタは、フェッラーラのエステ家のニッコロ三世の妻となるが、ニッコロが愛人との間に作っていた私生児ウーゴ・デステと愛し合うようになり、それが発覚してウーゴは処刑されるという話である。1913年12月10日発「水のあなたより」(《我等》1914年2月)では「D'Annunzio. Mascagni の新作オペラ Parisina のリブレットはダンヌンチオの作である。Ugo d'Este の継母パリジナとの恋物語である。」(下、399頁)と書かれている。

## 7. リビア戦争、そして第一次大戦へ

1911年9月29日、イタリアは植民地獲得を目指してオスマン帝国に宣戦布告し、地中海をはさんで対岸にあるオスマン帝国領トリポリタニア、キレナイカへの軍事行動を開始した。このリビア戦争のとき、ダンヌンツィオはそれまでとは違う一面を「椋鳥通信」で見せている。

フランスから《コリエーレ・デッラ・セーラ》にエッセイを連載中だった詩人は、それを中断して、1911年10月から翌年2月まで戦争を支持する十篇の詩『海の彼方での武勲をたたえる歌』(Canzoni della Gesta d'oltremare)を寄稿する。一つ目の「海の彼方の歌」(Canzone d'oltremare)は10月8日付の同紙に掲載された。1911年12月1日発の「椋鳥通信」(《スバル》1912年2月)が「○Corriere della Sera 紙上で Gabriele d'Annunzio の戦争の詩が発表せられた。」(下、14頁)、「○上に言った D'Annunzio の詩は La canzone d'oltre mare (海外の歌)と題して五十三闕から成り立っている。」(下、15頁)と報じているのは、このことである。ダンヌンツィオの提案で、一篇の詩のために文化面全面が使われた。1911年12月25日発(《スバル》1912年3月)には「○Corriere della Sera の通信員になって、Gabriele d'Annunzio が Tripolis へ行くそうだ。」(下、60頁)の報があるが、詩人がトリポリタニアの地中海沿岸の都市トリポリに行くことはなかった。

十篇の詩のうち、新聞への掲載が見送られたのが「ダーダネルス海峡の歌」(La canzone dei Dardanelli)である。1912年1月23日発「椋鳥通信」(《スバル》4月)

は、「○戦争の頌に次いで Gabriele d'Annunzio は Dardanell の頌を作ったが、Corriere della Sera でも、その他でも発表を謝絶した。ドイツとオオストリアとを攻撃することが余り甚しいからである。」(下、94-95頁)と簡潔にその理由にも触れている。

イタリア軍は内陸部の占領に苦戦し、東地中海にまで戦線を拡大する。ダーダネルス海峡の名が出てくるのはそのためである。この詩でダンヌンツィオは、同盟国であるドイツやオオストリアがイタリアに協力的な姿勢を示さないことに批判を向けている。特にオオストリアに対しては侮辱的な表現を用い、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世(1830-1916)を「天使の顔をした絞首刑執行人、永遠の絞首台にいる天使」(l'angelicato impiccatore, / l'Angelo della forza sempiterna)と呼んでいた。ダンヌンツィオには、イタリアに帰属すべき領土をオオストリアから奪回すべきであるという信念があるわけだが、《コリエーレ・デッラ・セーラ》の編集長は同盟国二国間の外交に配慮して慎重な判断を下した。

新聞掲載ができなかったため、本にするときは完全なかたちで収録したいと考えたダンヌンツィオは、出版社が「ダーダネルス海峡の歌」の問題箇所を削除を強く求めたにもかかわらず、その要請に応じなかった。十篇の詩がまとめられた『メロペ』(Merope)初版は、1912年1月24日、印刷所で政府当局の差し押さえを受けた。二日後、問題となった14行が削除され、代わりに政府の介入を説明する註の入った第二版が刊行された。

同年2月28日発(《スバル》6月)では「○Milano通信によれば、Gabriele d'Annunzio の戦争の詩を集めた本が出来たところが、Franz Joseph を刺った詩があるために、官没せられた。」(下、110頁)と初版にまつわる事柄のみを報じている。同じ通信内の続報は、オオストリアのホーフマンスタールの反応である。

○ Neue freie Presse (Wien) で、Hugo von Hofmannsthal が D'Annunzio の 埃帝 を刺った詩を罵った。「ダンヌンチオはダンテを祖とした詩人ではない。Tyrtaeos の琴を手にした Casanova である」と云っている。(下、115頁)

ホーフマンスタールにとって、ダンヌンツィオはかつて特別な存在であった。ドイツの出版社からダンヌンツィオの翻訳が本格的に刊行され始める以前から評論を書き始め、1898年のイタリア旅行ではカッポンチーナ荘に憧れの詩人を訪ねた。その後、相容れないものを感じ始めたようだが、そのことは表立って語られてはいなかった。しかし1912年2月2日、ウィーンの《新自由新聞》に発表された文章にははっきりと幻滅が示されていた。「あなたはもはや、ダンテに始まる脈々と続く伝統に名を連ねる人ではない。イタリアの詩人でも、イタリアの愛国者でもない。私の目に見えるのは、勝負の運に見放されたカサノヴァ、50歳のカサノヴァ、幸福でない時期のカサノヴァ、戦士の格好をしたカサノヴァが、ボタンを掛け違えたバスローブを着てテュルタイオスの琴を手にしている姿だ」<sup>26</sup>。テュルタイオスは、戦争を歌ったスパルタの詩人である。

<sup>26</sup> Hugo von Hofmannsthal, "Risposta alla «Nona canzone» di Gabriele D'Annunzio", in *Gabriele*

1912年10月、イタリアはトリポリタニアとキレナイカの領有を認められ、当初の目的を果たしたのであった。同年10月27日発（《スバル》1913年1月）は、イタリアとオスマン帝国との間に平和条約が結ばれたことを報告する。だがその直後にはブルガリア王国、セルビア、ギリシア王国がオスマン帝国に宣戦布告をしたことを知らせる（下、230頁）。ひとつ前の1912年10月13日発（《スバル》12月）が伝えていたように、10月8日、モンテネグロ王国がオスマン帝国に宣戦布告をし、第一次バルカン戦争が勃発していた（下、228頁）。このためにオスマン帝国はイタリアと停戦したのであった。

第一次バルカン戦争でオスマン帝国は敗北し、1913年5月末にこの戦争に関する講和条約が締結されるが、6月末から8月にかけてはマケドニアの領有などをめぐって第二次バルカン戦争が起こる。バルカン半島の情勢は不安定さを増していた。「横死はヨオロッパの大戦乱の基になるかも知れない」という不安は的中することになった。戦争は4年余り続き、複数の帝国が終焉を迎える。だがそうなることなど誰もまだ知らなかった。

「水のあなたより」で最後に伝えられたダンヌンツィオの消息は、1914年5月3日（《我等》7月）の「Gabriele d'Annunzio. パリイで大病になって、絶食している。」（下、454頁）であった。同年7月末に大戦が始まるとイタリアは中立の立場をとったが、ダンヌンツィオは、フランスから祖国へ向けて参戦するように訴え始めた。それは、同盟を結んでいるドイツ、オーストリア側ではなく、フランス、イギリスの協商国（連合国）側についての参戦であった。

1915年4月にイタリアが秘密協定を結び、協商国側での参戦を決定したあと、ダンヌンツィオは参戦キャンペーンを展開するため、5月初めに帰国した。詩人は秘密協定については何も知らぬままにイタリアに帰ったが、参戦キャンペーンでは大きな役割を果たした。5月23日、イタリアはオーストリアに宣戦布告し、7月には『メロペ』の完全な版が刊行された。「棕鳥」はもういなかった。

## おわりに

1919年8月18日の《東京朝日新聞》五面には「ダンヌンチオ氏」の顔写真があり、隣には「伊国文豪の意気 日本飛行は詩的幻想から」という見出しが掲げられている<sup>27</sup>。ローマの特派員がグラント・ホテルで詩人にインタビューをしたという記事である。大戦が終わったあと、ダンヌンツィオは、ローマ - 東京間の飛行を計画していた。翌月9月10日の同紙九面には、「伊文豪の歓迎 我が文壇は何をすべき」との見出しで、内田魯庵（1868-1929）の談話が載っている。魯庵は、前年に小山内薫が

*D'Annunzio e Eleonora Duse*, a cura di Arturo Mazzearella, traduzione di Marion Lindlar, Shakespeare & Company, Brescia, 1984, p. 85. オリジナルは以下に収録。Antwort auf die «Neunte Canzone» Gabriele D'Annunzios, in *Reden und Aufsätze 1891-1913*, Fischer Taschenbuch, Frankfurt am Main, 1979, pp. 625-629.

<sup>27</sup> 引用文の漢字は新字体に、仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。

ダンヌンツィオの戯曲『春の朝の夢』(*Sogno d'un mattino di primavera*, 1897年初演)を翻案した『緑の朝』を上演している<sup>28</sup>ことからその再演の実施やダンヌンツィオの演説会の開催を提案している。そして、「歓迎委員には文芸上ダ氏と最も関係の深い人が当り、委員長には新任帝国美術院長森鷗外博士の如きが最も適任であると思う」と述べている。ダンヌンツィオと鷗外は、ことによると対面する機会があったかもしれないなかった。

しかし、この記事掲載の翌日、9月11日にはダンヌンツィオは別の道を歩み始めていた。12日、詩人は義勇軍を率いてフィウメ(現・クロアチア、リエカ)進軍を行う。イタリアは戦勝国であったが、パリ講和会議においてイタリアの望んだフィウメの領有が認められなかったからである。この事件のためダンヌンツィオが日本に来ることはなかったが、ローマ - 東京間の飛行計画は実行に移され、1920年前半、アルトゥーロ・フェラリン(1895-1941)らは、1万8千キロの距離を多くの補給地を経由しながら、3ヵ月あまりをかけて日本へ飛んできた。

鷗外が航路でドイツより帰国した1888年から30年以上の時間が流れていた。シベリア鉄道の開通は日本とヨーロッパの往來の速度を速め、日刊紙を主な情報源とする「椋鳥通信」を鷗外に書かせた。旅客機の時代はまだ遠いが、その黎明期は始まろうとしていた。

## 文献一覧

### 【主要参考文献】

- Guglielmo Gatti, *Vita di Gabriele d'Annunzio*, Sansoni, Firenze, 1988 [1956].  
Giovanni Gullace, *Gabriele D'Annunzio in France: a study in cultural relations*, Syracuse University Press, New York, 1966.  
Paolo Chiara, *Vita di Gabriele d'Annunzio*, Mondadori, Milano, 2000 [1978].  
Paolo Alatri, *D'Annunzio*, UTET, Torino, 1983.  
John Woodhouse, *Gabriele D'Annunzio. Arcangelo ribelle*, Carocci, Roma, 2001.  
Peter Demetz, *The Air Show at Brescia, 1909*, Ferrar, Straus and Giroux, New York, 2002.  
Elena Raponi, *Hofmannsthal e l'Italia*, Vita e Pensiero, Milano, 2002.  
Lucy Hughes-Hallett, *Gabriele d'Annunzio: Poet, Seducer, and Preacher of War*, Alfredo A. Knopf, New York, 2013. (『ダンヌンツィオ 誘惑のファシスト』、柴田均訳、白水社、2017年)  
フランソワ・ルシュール『伝記 クロード・ドビュッシー』、笠羽映子訳、音楽之友社、2003年。

---

<sup>28</sup> cf. 熊谷知子「小山内薫の『緑の朝』試論——六世尾上菊五郎と松井須磨子が演じた「狂人」をめぐる——」『文学研究論集』(明治大学大学院)、第43号、2015年、209-227頁。